

こ
っ
そ
う
へ
い
や

『骨相平野』

相木
悟

【あらすじ】

1936年。水野義人（25）は、大学で骨相学を研究していた。骨相学とは、頭蓋骨の形状を診断し、人物の特性から死期等の未来までを見通す統計学。世間では色物扱いされる骨相学のスペシャリストである義人は、その才能を活かす場を探し求めていた。私生活では、幼馴染の泉圭子と相思相愛であったが、圭子の骨相を診た義人は、自分とは結ばれない未来を読みとってしまった、圭子の想いを拒否。豪商の親友、大戸竜造に圭子を託すのであった。

ある日、義人は航空本部長の山本五十六と知り合い、山本の目の前で骨相学をプレゼンする機会を得る。骨相学を使って、パイロット候補生の特性を見ぬく義人。その能力を評価した山本の計らいにより、義人は晴れてパイロット選別の職を得る。ようやく自分の居場所を義人は見つけたのであった。

1941年。太平洋戦争が開戦。義人は自分が識別した兵士たちに死相を見、その兵士をわざわざ戦地に送るサイクルに疑問をもつ。さらに竜造も特攻に志願し、帰らぬ人となり、未亡人となった圭子も病死。恩人の山本も南方で散ってしまふ。

義人は身近な人の死を見抜きながら何もできない自分にうんざりし、焦燥する。自らを見つめ直す義人。自分にできることは何か？義人は四苦八苦し、死を見抜ける能力は“死なない人間を見抜ける”という逆転の発想に至る。運命は自分で切り開く！ただちに義人は、死相の浮かんでいないはぐれ者たちを収集。私設軍を組織する。

1945年。終戦前夜、降伏を認めない陸軍将校によるクーデターが勃発。義人は私設軍を率いて暗躍し、クーデター阻止に成功する。が、義人は流れ弾に被弾。実は事前に自身の死相を読みとっていた義人。玉音放送を聴きながら、達成感に沸く仲間たちを遠目に、義人は目を閉じた。満ち足りた表情で――。

【登場人物】

水野 義人 みずの よしと 骨相学者。

泉 圭子 いずみ けいこ 義人の幼馴染。

大戸 竜造 おおと りゅうぞう 義人の幼馴染。豪商の跡取り。

加賀見 肇 かがみ はじめ 詐欺師。

奥 峰 徹 おく みねとおる 義人の助手。

堂上 聞汰 どうじょう もんた チンピラやくざ。

柄沢 長 次 がらさわ ちやうじ 元力士。

八代 重徳 やしろう しげのり 義人の大学の教授。

大西 瀧 次郎 おおにし たき じろう 日本海軍軍人。

桑原 虎 雄 くわばら とら お 日本海軍軍人。

山本 五十六 やまもと いそろく 日本海軍軍人。

畑中 健二 はたなか けんじ 日本陸軍軍人。

水野 タミ みずの 義人の母。

○ 人間の頭の図解

27個の器官に頭部を分割した、奇怪な骨相図。

テロップ―『1936年』

○ 大学・歴史科講義室

大版の骨相図を後ろに教壇に立ち、熱弁をふるっている一人の男。

水野義人（25）。

義人「人間の脳は、このように27の器官に分かれており、器官上の頭蓋骨の形状、すなわち頭の形を診れば、その人物の特性はおろか未来までも見通すことが可能である」

指し棒で図解を示しながら、
義人「例えば破壊管を診れば、その人物は暴力的かどうか、友情管を診れば、その人物は情に厚いかどうか、さらに寿命系器官の変化を診れば、その人物の死期すら判断が可能となる。すなわち、これが骨相学である」

義人、ここで新聞記事を拡げる。
紙面には、戦闘機事故の記事。

『多発する航空機事故！ 今日は大村、明日は呉、一日おいてまた追浜！』と小馬鹿にした文字が躍っている。

義人「さて。そこで見て頂きたいのが、最近話題になつている訓練中の戦闘機事故。民の血税により造られた貴重な戦闘機を戦場ではなく、訓練で大破せしめるとは、愚行の極みである。なぜこのような悲劇が起きるのか？」

新聞記事を丸めて、投げ捨てる。

義人「これはそもそも乗員の適性検査に問題があり、骨相学を駆使すれば、操縦に向いているパイロットを選出でき、こんな事故など未然に防げるであろう！」

一呼吸つき、受講生を見回す。

が、室内はガラーンとしており、後列の隅に居眠りしている学生が一人いるのみ。

義人「……（深いため息をつく）」
すると廊下で騒音が響き、室内に怒気を
含んだ右翼の学生運動家たちが雪崩込ん
でくる。
学生A「このご時勢に、オカルトまがいの太
占の講義を行っておるのはココか！」
たちまち学生たちに取り囲まれる義人。
学生B「貴殿は東北の農村の窮状をどう思
う？」
学生C「腐りきった官僚政治についてどう感
じている？」
学生D「操り人形となった陛下のお気持ちは
如何に？」
学生A「答える！　こんなくだらない講義に
うつつをぬかしている場合か！」
義人「……」
学生Aの顔をじっと見つめる義人。
学生A「なんだ？」
義人「恋愛管がへこんでいるな。君、最近、
恋人とうまくいってないな」
学生A「な、何？」
ざわつく周囲の学生たち。
学生A「（慌てて）女の問題など、自分にはな
い！　今大事であるのは――」
義人「ん？　君が関係を持っているのは人妻
だな。こりゃ不味い。受難の相が出る」
学生A「な、な、な！」
さらにざわつく周囲の学生たち。
義人「あと、さっきボタモチを食べたな」
学生A「う……そんなことまで……」
義人「口元に餡子がついている。農家の窮状を
訴える割には、贅沢なもの食べてるんだな」
学生A「この野郎！　バカにしゃがって！」
躍りかかる学生A。
それが引き金となり、一気に学生たちが
押し寄せ、モミクチャにされる義人。
騒乱の中、引き裂かれる骨相図。

○ 同・歴史科研究室

負った傷を、鏡を見て自ら消毒している

義人。

老教授、八代重徳（58）が部屋を掃除している。

八代「ずいぶんやられたね。全く血の気の多い連中だよ。うるさくてかなわん」

黙々と傷の手当をする義人。

八代「ヤツらからしたら君の骨相学の研究なんぞ、道楽に見えるンだろうな。ホホホ」

義人「……」

八代「しかし君も物好きだねえ」

地球儀を拭きながら、

八代「人は自分たちの理解の及ばないものを恐れる。かつて地動説を唱えたガリレオ・ガリレイは異端訊問にかけられ、生涯軟禁された」

義人「……」

八代「世の中には、表舞台に現れない偉人がたくさんいる。でも正しい学問は、いつか報われる。君の学問も然り。いつか認められる日がくるさ。くさらずにがんばることだよ」

義人「……ありがとうございます」

八代「ただ、認められるのは、死んでからかもしれないがね。ホホホホ」

○ 東京郊外の駅（夕方）

人気のない田舎駅に電車が滑り込む。降り立つ義人。

○ 道

ヒグラシの鳴き音。

田んぼに囲まれ、道祖神のお地藏さんが鎮座する道を義人が歩いてくる。

するとポカッポカッと、小石が義人の頭に直撃する。

子供A「骸骨お化けだーっ！」

子供B「ガシヤドクロだ、逃げろーっ！」

小石をぶつけて逃げていく子供たち。

何食わぬ顔で再び歩み出す義人。

○ 水野家・居間（夜）

飾られている日露戦役時の兵士の集合写真と、軍服姿の若い男の遺影。

食事中的義人と母、タミ（46）。

義人は食べながら、本を読んでいる。

タミ「……」

義人「……」

タミ「大学はどんなの？」

義人「どうって？」

タミ「状況に変化はないのかい？　ちゃんと

した講師になれるとか」

義人「ちゃんとした講師って何？」

タミ「義人。いつまで大学に残るんだい？　や

りたいことをやるのもいいけど、少しは稼

ぎに結ぶ付けておくれね」

タミ、食卓を片付けながら遺影を見上げ、

タミ「親子二代で骨相学に心を奪われて……。

血は争えないねえ」

食器を持って去っていくタミ。

義人、ふと父の遺影を見上げる。

義人「……」

○ 同・義人の部屋

古い骨相学や手相、占星術の類の文献が、山と積まれた室内。

義人が飼い猫と向かい合って、飼い猫の骨相を診ている。

義人「お前今、恋人がいるな」

猫「――」

義人「好き合ってるのか？」

猫「――」

義人「いずれ元気な子供を授かるぞ」

猫「にゃる」

興味なさ気に去っていく猫。

机に向かい、文献を開く義人。

コンコンと窓を叩く音が木霊する。

義人「？」

窓を開けると、ひよこつと泉圭子（25）

が顔を出す。

義人「わ、びっくりした。圭子か。どうした

ンだ、こんな時間に」
圭子「お願い、義人君、ちよつと来て！」

○ 道

圭子「早く！」

トロトロ歩く義人に、手を差し出す圭子。

義人、その手をとらず、

義人「こんな時間に二人で歩いてるところ見

られたら、やっかいなことになるぞ」

圭子「いいから早く！」

○ 泉家・前

駆け込む圭子と続く義人。

○ 同・寢室

圭子の父、栄太郎（53）が床に臥せつて、高熱にうなされている。

義人「……」

圭子「お願い」

義人、屈んで栄太郎の相を診る。

圭子「どう？」

義人「……」

圭子「正直に言って」

義人「（別室に移ろう、とジェスチャー）」

義人が腰を浮かそうとしたその時、パツと栄太郎の眼が見開く。

栄太郎、義人の存在に気付き、

栄太郎「お、お前は――」

無理に身体を起こし、義人に詰め寄る。

栄太郎「なんでお前がココにいる？（圭子

に）お前が呼んだのか？」

圭子「ごめんなさい、お父さん。私、お父さ

んのこと心配で――」

栄太郎「余計な真似するな！ わしは大丈夫

だ。自分の身体のこととは自分が一番よく分

かつとる」

義人、眼を合わさずに出ていこうとする。

栄太郎「おい待て！ わしの相を診たのか？」

義人「診てません」

栄太郎「診たんなら、診たと言え！ わしに

も死を宣告するのか？ 静子の時みたいに」

圭子「お父さん！」

栄太郎「死神だ、お前は」

義人「……」

圭子、栄太郎に掴みかかり、
圭子「お母さんが事故で死んだのは、義人君
のせいじゃないでしょ！ 義人君の予言が
なかったら、私だって一緒に死んでたかも
しれないんだよ！」

栄太郎、圭子を平手打ちする。

栄太郎「いい加減に眼を覚ませ、圭子。こん
な得体の知れん力を持つ人間は、何か恐ろ
しい魔物に憑りつかれとるんだ。そうに決
まっとる！」

障子が開き、大戸竜造（25）が部屋に
入ってくる。

栄太郎「ぼっちゃん！」

竜造「まあまあ落ち着いて」

栄太郎と圭子の間に入り、栄太郎をそっ
と布団に寝かす竜造。

圭子「竜造さん……」

栄太郎「わしがさっき呼んだんだ」

竜造「もうすぐ医者が来ますから」

その間に、そっと部屋を抜け出す義人。
背後では栄太郎が竜造に、「わしにもしも
のことがあったら圭子のこと、よろしく
お願いします」と懇願している。
ゆっくり障子をしめる義人。

○ 同・前

出てきた義人が空を見上げると、雨が降
っている。

圭子「待って」

傘を差し出す圭子。

そこに竜造もやって来る。

竜造「雨は予言出来ないのか？」

義人「空には頭蓋骨がないからな」

竜造「本当に融通のきかないヤツだな。あれ

ほど村で骨相見はやめろって言っただろ」
圭子「私が無理に頼んだの」

竜造 「圭子、親父さんにあやまってこい」
圭子 「……」

黙って帰ろうとする義人。

圭子 「義人君！」

義人 「？」

圭子 「結果を聞かせて。お父さんは……」

義人 「……（首を振る）」

圭子、瞬間的に涙がこみ上げ、至近の竜造をすり向けて義人の胸に飛び込む。

咄嗟に傘を落とす義人。

義人 「！」

竜造 「……」

義人の胸で泣き続ける圭子。
地面に転がった傘が雨が雨を受けている。

○ 道（日替わり）

道祖神のお地藏さんの前を葬列が通り過ぎていく。

栄太郎の遺影を持って歩く圭子。

○ 高台

義人が、遠くに見える葬列をぼんやり眺めている。

竜造 の声 「こんなトコにいたのか」

義人の横に立つ喪服姿の竜造。

義人 「お前こそこんなトコにいていいのか？」

竜造 「圭子はウチで預かることになった」

義人 「……」

竜造 「ゆくゆくは俺の嫁に迎えるつもりだ」

義人 「もともと圭子はお前の許嫁だろ？」

竜造 「お前はそれでいいのか？」

義人 「いいも何も、俺は文無し学者で、お前は米問屋の跡取りだ。口をはさむ権利はな

いよ

竜造 「じゃあ圭子の気持ちはどうなる？」

義人 「……」

竜造、怒りを押し込めた表情で、近くの木の枝をへし折る。

一息ついて気を落ち着かせ、

竜造 「義人。もう占いはやめて、ウチで働か

ないか？ 商売を手伝ってくれ。そうすれば、お前、圭子とも――」
義人「俺は骨相学をやめない！」
竜造「おい、少しは現実を見ろよ」
義人「現実が見えてるからこそ、俺はやめられない。お前は目の前で溺れてる人がいたら助けないのか？」
竜造「そりやお前――」
義人「世の中を救える学問なんだ。ただの占いなんかじゃない！」
竜造「……」
義人「……」
竜造「勝手にしろ！」
ツカツカと去っていく竜造。

○ 大学・歴史科講義室（日替わり）

テープで修復された骨相図の前で講義中の義人。
何となくイライラをひきずった口調となつている。
義人「よって、本形状の場合は、哲学器官と傲慢器官がこのように隆起しており――」
堂上の声「すんまへくん」
義人「？」
唯一の聴講生であるチンピラ風の男、堂上聞汰（29）が手をあげている。
堂上「それってあれでっか？ その頭のデコボコ具合を通例に当てはめるんは、つまるるところ、直感いう訳でっか？」
義人「いや、直感などではなく――」
堂上「そやかて、あんたが今言うた頭頂部の稜線、わしには全く違いがわからん。どうちやうねん、普通と」
義人「だからこの角度が――」
堂上「だから微妙すぎるっちゆうねん。もうちよつと具体的にやなあ」
義人「具体的って言われても……」
堂上「もうええわ。全然役に立たん！ 博打にや利用出来んわ」
義人「博打？ あんたどういう了見でココに

来た？　っていうか学生か？」

堂上「ほな、さいなら」

義人「待て！」

堂上を引き止める。

義人「骨相学はな、そんな下等行為に利用する学問じゃないんだ、人の役に立てるべき学問なんだ」

堂上「やかましな、何が下等じゃコラ！　なんやねん、お前、偉そうに！」

揉み合いになる二人。

その様子を扉の外から見ている八代教授と、横に控える大西瀧次郎（45）。

○ 同・歴史研究室

八代「まあ、楽にして」

八代教授と大西の前に座っている義人。

八代「こちら航空本部の教育部長をしている大西さん」

義人「航空本部？」

大西「大西です」

八代「こちらが噂の水野義人君」

義人「水野です。どうも」

大西「さっきの講義、拝聴しましたよ。いやはや驚きましたな。頭の形を見ただけで、あそこまで分かるもんですか。いやあ、感服した。ガハハハ」

八代「大西さんは私の遠い親戚でね」

大西、机の上に、訓練中の戦闘機事故を批難した例の記事を置く。

義人「あ……」

大西「実際、私共も頭を悩ましておってね。

色んな角度から対策を検討してはおるんだ」

義人「……」

大西「なかでも問題は適性検査でね。予科練でも予備学でも採用する際は、学術検査や身体検査と相当厳密に篩にかけておるんだ」

義人「……」

大西「東大の心理学教室に依頼して、実験心理学による適性検査もやってみたが、これも初めはいいが、如何せん成長性がない」

義人「……」

大西「要は、ダメと分かる前に不適合者が事故を起こし、尊い命が失われ、乏しい予算の中、高価な戦闘機が失われる」

義人「……」

大西「そこで、我々はしょっぱなから人間の特性を選び分けられる術をさぐっていたところ――」

八代「わしが君を紹介したという訳だよ」

大西「そういうことだ。ガハハハ」

義人「……」

義人にニヤリと微笑む八代教授。

机の下で、固く拳を握り締めている義人。

○ 航空本部・前（日替わり）

緊張した面持ちの義人が、建物を見上げ、中に入っていく。

○ 同・大西の執務室

大西「お来たか来たか」

義人を迎える大西と、その隣に立っている桑原虎雄（49）。

桑原「本当に若いな」

大西「ガハハハ。こちらは霞ヶ浦航空隊副長の桑原さん」

義人「はじめまして。水野です」

桑原「昼休みは短い。さっそくはじめよう」

大西「そうだな。うん。ガハハハ」

大西、義人に耳打ちするように、

大西「一見とつき難そうだが、悪い人じゃないから。力抜いて楽にな」

義人「……（大きく息を吐く）」

桑原「（外に向かつて）入れ」

ドアを開けて、ゾロゾロと航空隊の教員が数名入ってくる。

桑原「彼らは我が航空隊の教員だ。さっそく、

彼らの飛行機乗りとしての適性を簡単に甲

乙並で分けてもらえるか？」

義人「……はい」

教員の前に立ち、一人ずつ5秒ほど骨相

を診て、それぞれ甲、乙、並と評価を述べていく義人。
教員名簿を見ながら、名簿の採点と義人の採点を照らし合わせる大西と桑原。
あつという間に義人の採点が終わる。

大西「……」
桑原「……」

眼が点になる二人。
しばらく経って、お互いの眼を合わす。

○ 同（時間経過）

さらに数名の練習生を診ている義人。
相も変わらず、5秒ほどで採点を下していく。

依然、名簿を見ながら、呆然としている大西と桑原。

桑原「……そんなバカな」

大西「こりや予想以上だ」

桑原「我々が数年かけて判断した評価だぞ。

それをあかも簡単に……」

大西「桑原を隅に連れていき、

大西「桑原さん。これは決してバカにしたモンじゃありませんぜ」

桑原「……」

大西「是が非でも搭乗員採用の参考にすべきです」

桑原「……」

大西「海軍の航空隊ならどこでも出入りできるよう、嘱託という形でも彼を雇うべきです」

桑原「……」

桑原「……よし。なんとか上申書を提出しよう」

桑原「……よし。なんとか上申書を提出しよう」

二人のやりとりを心配そうに見守っている義人。

桑原「……」

二人のやりとりを心配そうに見守っている義人。

桑原「……」

○ 海軍省・人事局（日替わり）

困惑気味の担当官の前に座す桑原と大西。
後ろに控える義人。

担当官「骨相学……、つまるところ人相見で

すか？」
大西「まあ、そうだ」
担当官「うん。適性検査に人相見っているのは、ちよつと海軍としては……その、まことに言い難いんですが、体面的にどうか……」

○ 同・軍務局

同じく困惑気味の担当官に説明している大西。

大西「鍼とか灸だって、実際問題、いかがわしいじゃないか？ でもその効果を君だつて、否定できないだろ？」

担当官「いや、それとこれとは――」

大西「同じじゃないか！」

桑原「とにかく成果報告を見てくれ。それからの確に判断願いたい」

担当官「確かにこの結果はすごいと思いますよ。本当なら――」

大西「おい、俺らが騙してるとでも言うのか？」
激昂して立ち上がる大西を宥める桑原。
後ろで下を向いている義人。

○ 同・前

桑原「こりゃ、どうにもならんな」

大西「ああ、ダメだダメだ。どうしてあそこまで頭が固いかね？ 理屈ばかりこねやがって。これだから事務方はダメだ」

機嫌悪そうに肩を怒らせて歩く大西。

しょんぼりした表情で続く義人。

大西、義人の肩を掴み、

大西「そう落ち込むな。海軍の中でも分かつてくれる人はきつといる！ 牛鍋でも食っていくか？ ガハハハ」

義人「はあ……でも大丈夫です。慣れてますから」

いつの間にか立ち止まっていた桑原。

大西「桑原さん？」

桑原「そういえば、山本さんには話したか？」

大西「山本さん？ まだです」

桑原「航空機事故の一件では、機体の不備の苦情が全部、山本さんにいって相当参ってるって噂だからな」

大西「ああ、艦政本部のお偉方にもそのことで嘔みついてるみたいですね。板挟みになつて」

桑原「もしかしたらあの人なら、分かってくれるかもしれないぞ」

大西「山本さんか……」

しばし思案する桑原と大西。

義人「あの山本さんっていうのは？」

大西「もちろん航空本部長の山本五十六閣下だよ。ガハハハ」

○ 航空本部・本部長室・前（日替わり）

ドアの前に立つ桑原、大西、義人。

桑原がノックしようとする、ドアが開き、眼を真っ赤にした士官が出てくる。

義人「?!」

桑原「ご苦労さん」

大西「今日は？」

士官「徹夜で将棋につき合わされました……。ようやく解放です」

フラフラと帰っていく士官。

桑原「相変わらずだな、あの人も」

大西「付き合わされる方は、たまったもんじやありませんな」

義人「？」

○ 同・本部長室

ノックの音。

桑原の声「霞ヶ浦航空隊、桑原です」

大西の声「大西です」

山本の声「おう」

桑原の声「失礼します」

入室する桑原と大西、そして義人。

向かいにある本部長席は空で、横の応接テーブルに座って将棋盤をにらみつけている男が一人。

その男、山本五十六（52）。

桑原「すみません、お時間をとらせまして」
山本「まったくくだ。いい勝負だったのに」

名残惜しそうに将棋盤を離れ、席に着く
山本。

書類を取り出し、

山本「えくと、水野義人君だっけ？ 彼？」

桑原「ハイ」

義人「水野義人です」

山本「上申書は読ませてもらったよ」

桑原「私共としましては――」

山本「興味深いね」

桑原「は？」

山本「ん？」

桑原「え？」

山本「なんだよ君、その反応は？ 私が興味
を持ったら何か不味いのか？」

桑原「いえ、今まで人事局や軍務局に全く相
手にされなかったものでして、つい面喰ら
いました」

山本「ダメだよ、あいつらは。思考停止して
るからね」

三人の眼に、パッと光が灯る。

山本「時に水野君」

義人「はい」

山本「(資料を見ながら)骨相学とは、これは
あれかね？ 要約するにだ、福耳の人間は
金持ちになるとか、齒の出た女は情が深い、
とかそういうった昔からある観相法の一環か
ね？」

義人「正直に申しまして、そこに勘を働かせ
るのは確かですが、おっしゃる通り、基本
的には昔からある応用統計学です」

山本「そうか。なるほどな」

少し考え込む山本。

固唾をのんで見守る桑原、大西、義人。

山本「よし！」

電話機を取る山本。

山本「山本だが。うむ。すまんが残っておる
のを数人寄越してくれ」

○ 同（時間経過）

十数人の海軍士官が、部屋に集められている。

緊張の面持ちでその前に立つ義人。

山本「では、この中で誰が飛行将校か分かるか？」

義人「……」

じつと士官たちを眺め渡し、「あなたとあなた」と即座に指摘する義人。

ざわつく士官たち。

山本「他にいないか？」

義人「いません」

その時、士官の一人が前に出る。

士官A「私も飛行機乗りだがね」

義人「あなたは飛行機乗りかもしれませんが、乗らない方が賢明です」

再びざわつく士官たち。

そして次の瞬間に吹き出して笑い出す。様子を見守っていた桑原が大西に、小声で囁く。

桑原「あの男、海軍大学出の飛行艇パイロットなんだが、頭は優秀でも操縦が下手だね。昨年、海軍省に転勤して来たんだ」

山本「せっかくだ、他に誰か骨相を診てもらいたい者はいないか？ おい、お前、診てもらえ」

山本が指摘した士官Bを診る義人。

義人「あなたは裕福な家の出身ですね。性格は豪胆で人望に厚い。お酒も強い。でも、実は高いところが苦手ですね」

「う……」とつまる士官B。

山本「次、お前」

義人、士官Cを診て、

義人「あなた他人の姓をついでいるでしよう？」

山本「何？ 君は養子だったのか？」

士官C「実は、ハイ、そうです」

義人「今、縁談で迷ってますね」

山本「なんだ、そうなのか？」

士官C「恥ずかしながら、義理の絡んだもの

が数件舞い込んできました……」
義人「2番目の方にするといいでしょう。あなた
の気持ちのままに」

士官C「え……」

赤くなる士官C。

山本「もういいだろう」

騒然となる一同。

顔を見合わして、満足そうにうなずき合
う桑原と大西。

大西「やっぱり最初から山本さんしかない
と思っただんだよなあ」

桑原「嘘つけ」

山本「水野君」

義人「はい」

山本「トランプはできるか？」

義人「いえ……」

桑原「それでは私共はこれで――」

大西「失礼します！」

山本「おい、ちよつと待て」

士官共々、先を争って部屋を出ていき、
あつという間に山本と義人の二人きり
なる。

山本「なんだ、ブリッジでもやろうと思った
のに……付き合いの悪いやつらだな」

義人「……」

山本「トランプはダメなんだな？」

義人「はあ」

山本「じゃあ将棋は？」

義人「すみません……」

山本「そうか……」

○ 同（時間経過・夜）

将棋盤の上に駒を積んで、将棋倒しをし
ている山本と義人。

慎重に駒を抜いていく二人。

山本「君はどうして、骨相学に興味をもった
のかね？」

義人「父がずっと研究をしまして、子供の
頃から、父の蔵書を読んでいるうちに自然
に……」

山本「じゃあ父君も研究者に？」
義人「いえ、父は軍隊に入って、日本海海戦で戦死しました」
山本「そうか……そうだったか」
山本「私も海戦に参加してね。人差し指と中指を失った。これも何かの縁かな？」
山本「少し和んで、二人向かい合う。」
山本「私はギャンブルに目がなくてね」
義人「はあ」
山本「これが一人で出来ないから始末が悪い。常に仲間をさがしているが、付き合っていく人間がいなくてね。苦労が絶えんよ」
義人「……」
山本「でもね、水野君。ギャンブルは、なかなかどうして奥が深い。戦況を冷静に分析する目、引き際の判断と、戦場や外交の戦略に通じる部分もあるんだ」
義人「……」
山本「何が言いたいか分かるか？ 水野君」
義人「……」
山本「応用統計学と勘によって人物の特性を導き出す君の骨相学。それは実にギャンブルの特性と通じている。ということはだ、自動的に、戦場や外交の戦略にも通じるという訳だ」
義人「……」
山本「君の骨相学は、立派に世の中の役に立つのだよ」
義人「！」
義人「義人の引いた駒が、パチンと音を立て、駒の山が崩れる。」
山本「まあ、私が当たり前に思うことでも、視野の狭い人間にはなかなか理解されないんだがね。やっぱり苦労が絶えんよ」
山本「机から手帖を取り出す。」
山本「私がどれだけ航空機の重要性を説いてもなかなか理解されん。艦隊派は大きな戦艦を造ることに躍起になつとる。これからの戦争は航空機の時代だというのに……」

手帖をテーブルの上に置く山本。

義人「？」

山本「この手帖には、航空機事故で死んだ私の部下の名前を記している」

義人「……」

山本「もう増やしたくはない」

山本、姿勢を正し、

山本「水野君、力を貸してくれ」

頭を下げる山本。

義人「あ、頭を上げてください」

山本「よろしく頼む」

義人「わかりました。その前に――」

山本「？」

義人「将棋を教えてください。私でよければいつでもお相手します」

○ 霞ヶ浦航空隊・採用試験会場（日替わり）

練習生、予備学生の採用試験に立ち会い、骨相を診断する義人。

応募者の骨相から、学術、体術といったカテゴリーに甲乙評価を下していく。

○ 同（時間経過）

眼鏡をかけた勤勉な助手、奥峰徹（20）と診断表を吟味する義人。

義人「この人は適性はあるが、事故を起こす確率が高い。外した方がいい」

奥峰「はい」

義人「この人も適性はあるが、残念ながら死

相が浮かんでいる」

奥峰「死相……ですか？」

義人「この人も近々、大怪我をする。外そう」

奥峰「あの、ふたつばかりいいですか？」

義人「どうぞ」

奥峰「死ぬ時期は、どれぐらい正確に分かるんですか？」

義人「そうだな、だいたい1、2年の誤差はあるかな。さすがにもうすぐ死ぬって緊急

の人は、正確に分かるけどね」

奥峰「じゃあ死相が出ている人を、もし採用

しなかった場合、助かるんですか？」
義人「いや。何らかの理由で死ぬだろうね」
奥峰「水野さんの予言には、絶対逆らえない
って訳です」
義人「俺の予言というより、人は運命には逆
らえない。俺はただ運命を覗き見ているだ
けさ」
奥峰「なるほど」
義人「ちなみに君に死相は出てないから安心
して。でも虫歯には苦しむから覚悟しとい
た方がいい」

○ 義人の村の道

帰ってくる義人。
以前、義人に石を投げた子供が、義人を
見て、うって変わってちよこんと頭を下
げて挨拶する。
子供たちに近づく義人。
ビクツとなる子供たち。
そんな子供の頭を優しく撫でて、去って
いく。

○ 水野家・縁側（日替わり・夜）

並んでスイカを食べている義人、圭子、
竜造。
後ろで団扇をあおいでいるタミ。
圭子「ホントによかったね、義人君。大出世
じゃない。スゴいスゴい」
竜造「まさか軍隊が認めるとはな」
タミ「なんだか最近、急に村人の当たりがよ
くなつたねえ」
圭子「そりゃ、軍人さんを村八分にする訳に
はいかないもの」
竜造「軍人たつて軍属だろ？」
圭子「軍属だつて、軍人に変わりないでしょ？
そうだよな？ 義人君」
興味なさそうにスイカの種を庭に吐き飛
ばしている義人。
張り合つて遠くに飛ばす竜造。
二人、無言の戦い。

呆れる圭子。

タミ「父親は軍隊に入って骨相学の研究を断たれ、片や息子は骨相学者として軍人になるなんて皮肉だねえ」

義人「皮肉でもなんでもないよ。父さんの遺志を俺が受け継いだんだ」

タミ「……」
静かに眼を閉じ、遺影に手を合わせるタミ。

竜造「まあ、せいぜいがんばれよ。俺だって負けないからな（立ち上がる）」

義人に握手を求める竜造。

応じる義人。

竜造「ちよ、手ベタベタじゃねーか」

義人「お前もだよ」

竜造「帰るぞ、圭子」

圭子「あ、うん」

竜造の後について帰っていく圭子。
その様子を見やるタミ。

○ 同・義人の部屋

義人が人事資料の整理をしている。

タミの声「ちよっといいかい？」

義人「うん」

障子を開けて入ってくるタミ。

神妙なその表情。

義人「何？」

タミ「今のお前はもう軍人恩給を受ける親の脛かじりじゃない。立派に独り立ちした一人前だ。だからこの際、はっきり言わせてもらおうよ」

義人「だから何？まだるっこしい」

タミ「圭子ちゃんのことだよ」

義人「……」

タミ「あの子、ずっとお前のこと――」

義人「……」

タミ「お前だってあの子のこと――」

義人「……」

タミ「二人を見てりや分かるよ」

義人「……」

タミ「もういいンじゃないかい？ 圭子ちゃん
の気持ちに答えてあげなさい」

義人「……」

タミ「竜造ぼっちゃんだって分かってくれる。
ぼっちゃんは、そんな器の小さい男じゃな
いよ」

義人「いいンだよ。もうその話は終わって
んだ」

ペラペラ無意味に辞書をめくる義人。

タミ「もう煮え切らないね！ お前、男だろ！
うじうじうじうじナメクジみたいに！」

義人「……」

タミ「それとも圭子ちゃんと結婚できない理
由でもあるのかい？」

辞書をボタンと閉める義人。

義人「ごめん、忙しいンだ」

○ 繁華街（日替わり・夜）

義人がブラブラぶらぶらついている。
考え込みながら、当てもなくただ歩いて
いる。

路上の手相占いの手製看板になんとなく
足を止める義人。

怪しい手相家、加賀見肇（26）に、若
い女性が手相を診てもらっている。

加賀見「金運、寿命はバツチリなんだけど、
ただし、ただしよ、恋愛運がよくない。う
ん。見てここ。恋愛線と結婚線、途中で消
滅してるでしょ？ あちやう、残念！」

女性「そんな……」

加賀見「でも大丈夫。ご安心あれ」

手元にある桃色の石鹸を取り出す。

加賀見「この仙桃石鹸で一か月、手を洗えば
恋愛線も結婚線も、おまけに生命線もぐん
ぐん伸びちゃうから。しかも石鹸一個、た
ったの百円！」

義人「こんな怪しげな石鹸使わなくても、遅
くとも来年の春までは結婚できる」

加賀見「ちよつと何あんだ？」

義人「（さらに骨相を診て）姉と妹が次々に結

婚したのかな？」

女性「え、どうしてそのこと……」

義人「家族官の異変に呼応して、感情官が乱れてる。でも安心して。いい縁談がまいこんでくるから」

女性「あ、ありがとうございます」

虚を突かれながらも、礼を言つて去つていく女性。

ポカーンとなっている加賀見。

義人「失礼した」

加賀見「ちよつと待って、旦那！」

義人「？」

加賀見「今の一体？」

義人「営業妨害して悪かった。もう邪魔はしないから続けてくれ。でも石鹼百円は高すぎる。せめて十円だ」

加賀見「お時間あるなら一杯どうスカ？ 奢りやすぜ」

○ 居酒屋

熱気ムンムンに賑わっている店内。

片隅で飲んでいる義人と加賀見。

義人はサイダー。

加賀見「骨相学？ へえ、そういうのがあるんですか。知らなかったなあ。しかも軍に正式に採用されてるなんて、俄かには信じらんねーなあ」

義人「手相家だろ？ フラント・ガルの名前

ぐらい聞いたことあるだろう」

加賀見「(店員に)こっち、酒ちょうだい。旦那は、酒は一滴もダメなんですかい？」

義人「飲んだことないから分からない」

加賀見「じゃあ、ちよつとやりましょうよ。

ね？」

義人「こんな店も初めて入った」

加賀見「じゃあ、旦那のアレ、なんだっけ？

そう、骨相学は本物な訳ですね？」

義人「本物ってどういう意味だよ」

加賀見「だってあつしの手相はインチキですから」

義人「え、そうなのか？」
加賀見「だいたい物売りつけるのは、インチキですよ」
義人「帰る」
加賀見「まあまあまあ。何か嫌なことあったンでしょ？」
義人「？」
加賀見「それぐらい素人のあつしでも分かりまさあ。思いつめた顔してるもの。さあさ、座って、とりあえず。飲みましょう。ね？」
義人「……」
加賀見「あつしでよかったら悩み聞きやすから。ぶちまけたらスツキリしやすって」
義人「何を企んでる？ 石鹸は買わないぞ」
加賀見「それよかあつしと組んで、一儲けしやせんか？ 旦那の能力がありや、即座に大金持ちになれやすぜ」
義人「帰る」
加賀見「まあまあまあ」
加賀見、隣の陸軍軍人グループに酒を運んで、
加賀見「酒まだ？ こっちの方が先だろ、ねーちゃん！」
それを聞きとがめた若い軍人が一人、立ち上がる。
その男、畑中健二（24）。
畑中「なんだ貴様」
加賀見「いや、ハハハ、こっちの方が先に注文したンでアレおかしななって、つい……」
畑中「我らはお国を守る軍人ぞ。自粛せい」
加賀見「ヘイ、その通りで。すみません」
畑中、黙ってサイダーを飲んでいる義人に近づき、
畑中「おい、お前」
義人「？」
畑中「話が聴こえてきたンだが、お前が噂に聞く海軍のペテン師か？」
義人「……」
畑中「海軍に妙な人相見が入りして、適性検査を行つとると話題になつとるぞ」

義人「噂のもととは自分に間違いありません。ただペテン師は訂正して下さい」

畑中「何？ これだから海軍は。人相見なんぞ祭りの余興だろうが。それを真剣に雇うなんぞ気がふれたとしか思えん」

義人「……」

畑中「未来は自分で切り開くものだ。占いなんぞに左右されてどうする！ お前もしや、女も占いで選ぶのか？」

義人「(カチン！)」

義人、サイダーを畑中の顔面にぶっかける。

畑中「ぶはっ！」

義人「自分からしたら関東軍の増長こそ、気がふれたとしか思えません」

畑中「き、貴様、我が関東軍を愚弄するか！ それでも帝国軍人か！ 許さん！」

十四年式拳銃を抜く畑中。
どよめく周囲。

さっさと逃げる加賀見。

畑中「聞くところによると死相もよめるそうじゃないか？ 自分の死期は分かるのか？」

義人「……」

安全栓に指をかける畑中。

畑中「どうなんだ？」

義人「僕はともかく、あなたは弾に当たって死ぬ。そういう相をしています。ご愁傷様です」

畑中「何を！ 戦場で死ぬのなら悔いはない！ ただお前はココで犬死だ！」

引き金を引こうとした畑中に飛びかかる仲間の陸士教官たち。
店内は大騒動となる。

○ 水野家・義人の部屋（日替わり・夜）

ボーっと机に向かっている義人。

コンコンと窓を叩く音が木霊する。

義人「！」

窓を開けると、ひよこつと圭子が顔を出す。

義人「……圭子」
圭子「ちよつといい？」
義人「なんで表から入って来ないんだよ」
圭子「……竜造さんから、ハッキリ返事して
くれて言われた」
義人「……返事って？」
圭子「……」
義人「……」
圭子「言わなくてもわかるでしょ？」
義人「……」
圭子「ねえ、どうして？ どうしてなの？」
義人「……」
圭子「……もしかしてだけど……」
義人「……」
圭子「私の顔にそう出てるの？」
義人「……」
圭子「私と竜造さんが……」
義人「もう遅いから帰れよ」
圭子「じゃあ私の相を診てよ、今。私は誰と
結婚するの？」
義人「……」
圭子「そんなのおかしいよ。見えた未来に従
うなんて変よ。本末転倒よ」
義人「運命は絶対なんだ」
圭子「……」
義人「誰にも……変えられないんだ」
圭子「……」
義人「……」
圭子「……部屋にも入れてくれないんだ」
義人「……」
圭子「わかった……。じゃあずっとそうやつ
て一人でいればいいじゃない」
義人「……」
圭子「……」
義人「……」
圭子「さよなら」
去っていく圭子。
闇に消える後ろ姿を見送る義人。

○ 田舎の駅（日替わり）

ホームに引越荷物を背負った義人が立つ。
電車がホームにすべり込んでくる。
何とはなしに周囲を見回す義人。

義人「……」

電車に乗り込む。

ゆつくり発車する電車。

○ 霞ヶ浦航空隊

はためく日章旗。

テロップ―『1941年』

○ 同・採用試験会場

応募者の骨相を診ている義人。

一段落ついて、急に考え込む。

奥峰「どうしたんですか？」

義人「んん……なんか最近……」

奥峰「確かに異常ですわね」

義人「……気付いてた？」

奥峰「そりゃ気付きます」

○ 花街の座敷（夜）

遊女をはべらして騒いでいる加賀見。

相変わらずサイダーをちびちびやっている義人がいる。

遊女A「ちよつとあんた、そんなもんで酔えるの？ 安上がりねエ」

義人「……気を付けた方がいい」

遊女A「は？」

義人「酒の飲み過ぎ。内臓がやられてるぞ。」

近々倒れる」

遊女A「縁起でもない！」

義人（遊女Bに）君は故郷に片想いの男がいるな。それから、その男の子供を……ん？

墮ろしたのか？」

遊女B「！」

義人「あ……」

遊女A「この子、地主の若ボンに遊ばれて捨てられたんだよ。かわいそうに、お腹の子供も処分させられて。あんたさ、占いだか

義人「あ……」

遊女A「この子、地主の若ボンに遊ばれて捨てられたんだよ。かわいそうに、お腹の子供も処分させられて。あんたさ、占いだか

義人「あ……」

遊女A「この子、地主の若ボンに遊ばれて捨てられたんだよ。かわいそうに、お腹の子供も処分させられて。あんたさ、占いだか

義人「あ……」

なんだかしらないけど、ちよつとは他人の
気持ちも占いな。さもないと嫌われるよ」
義人「……慣れてるよ。昔は村で化け物扱い
だ」

加賀見「(義人にまわりつき)旦那、一晚
ぐらいは骨相学、忘れましようや」

義人「忘れたくても顔を見りやー」

義人、ふと遊女たちを見回し、素早く一
人一人の相を診る。

義人「!？」

加賀見「どうかしやしたか？何か妙なもので
も？」

急に立ち上がり、外に飛び出す義人。

○ 同・前の通り

酔客で賑わう通り。

走ってやってくる義人。

周囲の道行く人々の相を診る。

義人「これは……」

加賀見「(追いついて)どうしたンスか、旦那。

顔色悪いですぜ」

義人「昔、子供の頃、街で死相が浮かんでい
る人が多く目について不思議に思っていた

ら、関東大震災が起きた」

加賀見「え、じゃあ、また地震が!？」

義人「いや、違う。夫人には親しい人間を失
う後家相が出る。それに最近、軍隊でも

死相が出る人間が異常に多い」

加賀見「ってことは……?」

義人「戦争だ。大きい戦争が起きるぞ」

加賀見「よし、ついに来たか! 相手はア

メリカですかい?」

義人「……しかも負けるな」

加賀見「はえ?」

義人「この死相の量は……間違いなく本土が
攻撃される」

加賀見「だ、旦那。あつしは大丈夫ですよね?
死なないですよね?」

○ 戦艦『長門』(日替わり)

停泊しているその威容。

○ 同・長官公室

山本を訪ねている義人。

山本「すまないな、こんなむさ苦しいところに呼び出して。何しろ米内さんがうるさくてな。これでもわしには敵が多いから、こんな場所に閉じ込められとる。暗殺封じだ」

義人「いえ、こちらこそ突然」

山本「そういえば久しぶりだな、水野君。私が長官になってから会ってなかったんじゃないか？ どうだ、将棋は上達したか？」

義人「長官殿」

山本「どうした、あらたまつて」

義人「近々、戦争が起きます」

山本「……なんだ、骨相学はそんなことまで予言できるのか？」

義人「しかも敗色が濃厚です。膨大な数、おそらく数百万単位の軍人と民間人が命を落とします」

山本「そうか……。やはり相手はアメリカになるんだろな」

義人「やはりって……」

深く椅子に腰かける山本。

山本「……私がアメリカに滞在していた時、アメリカ人の知り合いが家を買ったというので、ついていったことがある。広大な土地に家が一軒、ポツンとあってね。どこからどこまでがこの家の敷地だい？ って私は聞いた。すると不動産屋は言うんだ。はるか地平線の上にはえた一本の木を指して、あそこまでがこの家の敷地ですって。たまげたね」

義人「……」

山本「アメリカに比べたら日本は、まさにこのせま苦しい一室だよ。規模と物量が違う。戦争しても勝てん。単純な応用統計学だよ、君」

義人「そんな、それを分かって……」

山本「皆まで言うな、水野君」

義人「……」

山本「三国同盟が締結されたんだ。仕方ない。

陸軍も硬化して、もう支那から引けなくなつとる。そうなるとドイツと手を組んだ日本を、向こうさんが放っておく訳がない」

義人「……」

山本「向こうさんがやる気になれば、こちらもやるしかないさ。石油や鉄を経済封鎖されたンじゃ、開戦以外に打つ手はない」

義人「……」

山本「どうしようもない時代の流れというモノもある。アメリカとの戦争は、その流れだ。君なら承知だろう？」

義人「でも……」

山本「もちろんその中でもがくさ。先手で暴れるだけ暴れて、早期講和に持ち込む。これしかあるまい」

○ 霞ヶ浦航空隊・広場（日替わり）

ラジオが開戦と真珠湾攻撃の成功を称えている。

その報に湧き立っている隊内。

一人、義人だけが浮かない顔をしている。

そんな義人の肩を叩く桑原。

桑原「これからが大変だぞ、水野君」

義人「……」

○ 映画館

スクリーンに映し出されるニュース・フィルム。

字幕で刻まれている「海軍省・陸軍省検閲済」の印。

ミッドウェー海戦、ソロモン海戦、レンネン島沖海戦、とニュース内では、日本軍の戦勝が高らかに報じられている。

テロップ「『1943年』

スクリーンを眺めていた義人。

映画本編が始まる前に席を立つ。

○ 霞ヶ浦航空隊・採用試験会場

若い応募者の骨相を診ている義人。

義人「……君は画が好きかい？」

応募者「え、あ、はい。実は画家を目指して
たんですけど、こういうご時世にそんなこ
としてる場合じゃないと……」

義人「君は自覚してないかもしれないけど、
たいした才能だ。天才といってもいい。戦
場なんか行かずに画を書いたらどうだい？」

応募者「??」あの……それはどういう意味
でしょうか？」

義人「すまん。悪かった」

首を捻りながら出ていく応募者。

奥峰「また死相が見えたんですか？」

義人「死相が見える人間を戦地に送る意味つ
てあるのかな？」

奥峰「戦時中なんですから仕方ありませんよ。
前みたいに死相の見える人間をいちいち省
いていたら、戦場に行く人間がいなくなり
ます。それに死ぬまでに活躍すれば、充分、
意味はあるでしょう」

義人「出来れば畳の上で死なせてやりたいけ
どな」

奥峰「日本男児はそんな柔なこと願っていま
せんよ」

義人「……」

奥峰「そろそろ次の応募者来ますよ」

義人「ああ……」

扉を開けて、応募者が入ってくる。

竜造の声「よろしくお願いします！」

声に「!？」と顔を上げる義人。

竜造が眼の前に立っている。

義人「竜造！」

竜造「久しぶりだな。人相見つていうから、

お前だろうと思ってたよ」

義人「お前、でもどういいうつもりだ？ 赤紙

が来たのか？」

竜造「いや志願した」

義人「はあ？」

竜造「俺だってまだ若いんだ。お国のために
この身体を役立てたいと思ってな」

義人「……圭子は何て言ってる」
竜造「喜んでくれたよ。当たり前前じゃないか」
義人「……」
奥峰「水野さん、奥がつかえてますので」
竜造「そうだそう。早く骨相を診てくれ。」
俺なら絶対飛行機乗りの才能あるぞ」
やむなく竜造の骨相を診る義人。
義人「……！」
竜造「？」
義人、プイツと横を向いて診断表に記入する。
義人「……」
竜造「……」
義人「……じゃあ次の人」
竜造「おいおい、どうなんだ？ 結果は？」
奥峰「結果は教えられません」
竜造「幼馴染なんだ。教えてくれてもいいだろう？」
義人「（眼を合わさず）次の人」
竜造「おい、待て、義人」
義人「なんだよ」
竜造「俺の顔見ろ」
義人「……」
竜造「……」
義人「……」
竜造「俺に死相を見たな？ お前」
義人「は？ バカ言うなよ。そんな訳——」
竜造「子供の頃から一緒に育ったんだ。骨相術なんか使わなくても、俺にはお前が嘘言ってることぐらい分かる」
義人「忙しいんだ。いい加減にしてくれ」
竜造「お前は嘘をつくと眉間にしわが寄る」
ハッとして眉間に手を当てる義人。
竜造「……」
奥峰「（苦笑）」
義人「！（竜造のブラフに引っ掛かったことに気付く）」
竜造「……やっぱりお前は融通きかないな」
義人「……」
竜造「……」
竜造「そうか。俺は死ぬのか……」

義人「竜造……」

竜造「義人。たまには村に帰れよ。圭子にも顔をさせてやれ。さみしがってるぞ」

義人、竜造に近付き小声で、

義人「いいか、よく聞け。日本は戦争に負ける」

竜造「え？」

義人「今、東京の街中は死相だらけだ。おそ

らく東京は焼け野原になる。兵士の死相の数も尋常じゃない」

竜造「……」

義人「負け戦で死ぬことはない。見たところ、まだ死ぬまで1年、いや2年あるかもしれない。せめて最後は圭子のもとで――」

竜造「お前、正気か！」

義人の襟首をねじ上げる竜造。

竜造「多くの同胞がお国のために命を散らしている時に、俺だけそんな真似ができるか！ それに負けるかどうかは分かんたろう？」

義人「負ける。俺には断言できる！」

竜造「この非国民が！」

揉み合いになる義人と竜造を必死にとめる奥峰。

○ 田舎の駅（日替わり）

海兵団に入る竜造を盛大に見送っている村の人々。

国旗を振っている子供たち。

隅の方で義人がそつと見送っている。

笑顔で竜造を電車に送り出す圭子。

電車が出発する。

電車が見えなくなつて、踵を返す義人。

ふと圭子の方を振り返る。

圭子は口を抑え、涙を流している。

義人「……」

一瞬、圭子の方に向かおうとするも、足を止める義人。

その間に圭子は親類と共に、駅を離れていく。

一瞬だけ振り返った圭子と眼が合う義人。
何も起こることなく、二人の距離は離れていく。

○ 路地（日替わり・夜）

コソコソ人目を避けて歩く人影。
物陰でその人影を監視する義人。
人影がある民家に入ろうとした、その瞬間、義人が前に躍り出る。

人影「！」

義人「山本長官」

街灯に照らされた人影は山本であった。

山本「なんだ、君か……」

○ 山本の隠れ家

山本の前で頭を下げている義人。

義人「お願いします、長官殿。私を、私を前

線へ送ってください」

山本「まあまあ、落ち着いて」

義人「お願いします」

そこに山本の花柳界の匂いのする愛人が
お茶を運んでくる。

義人の只ならぬ気迫に気圧される愛人。

山本「よくココがわかったな」

義人「米内大臣に教えてもらいました」

山本「愛人の家まで把握しとるのか……。恐

ろしいお人だ」

義人「長官殿！」

山本「わかった。言い分はわかったから」

義人「では――」

山本「ダメだ」

義人「え？」

山本「（愛人に）おくい富ちゃん、肩こった。
もんでちょうだい」

義人「長官殿！」

山本「しつこいね、君も。ダメと言ったらダメだ」

義人「なぜですか？」

山本「行ってどうする？」

義人「私の骨相学は、戦場で役に立ちます」

山本「どう役に立つンだい？」

義人「それは……死相のない兵士を組織して、それで……」

山本「わかった。仮にそれで君の造った不死身の軍隊が、南方のどこかで勝利するとしても。だがな、そんな局地的な勝利では、もうどうにもならんところまで来とるンだ、戦況は」

義人「それでも何もしないよりは――」

山本「いつか言った早期講和の機も逃した。もうあとは出来るだけ喰らいついて、降伏の条件をいくらかマシにするのみだ」

義人「しかし、私は国内でじっとしていられません！」

山本「いいか、水野君。私は戦略家で、君は戦術家だ。戦術家は戦略家の命令に従うものだ」

義人「……」

山本「それに、だれも君にじっとしてろなんて言っとらん。君の成すべきことは内地にある。そう言っとるンだ」

山本、義人の前に顔を突き出し、

山本「水野君。わしの相を診てくれんか」

義人「……」

山本「……」

義人「……！」

山本「(優しく微笑む)」

義人の肩をポンと叩いて、悟ったように頷く山本。

山本「今日は将棋、付き合ってもらおうぞ。(奥に)えくと、将棋盤はどこにあったかな？」

と、部屋を出ていく山本。

山本の声「早く日がな一日、のんびり将棋をさせる平和な日々がくるといいンだかな。戦争は盤面の上だけで充分だよ」

呆然と突っ立ったままの義人。

ふと見ると山本の文机の上に、万葉集と共に例の手帖が数冊積まれている。

義人「!(シヨック)」

居たたまれなくなり、部屋の窓から外に

飛び出す義人。

○ 街中

やみくもに突っ走る義人。
脇に眼を向けると、道行く人々の顔が皆、
シヤレコウベと化している。

義人「ひっ！」

幻想を必死に振り払い、とにかく走り続ける。

○ 霞ヶ浦航空隊・玄関（日替わり・朝）

疲れのたまった顔で出勤してくる義人。

桑原と大西が入口で待ち構えている。

義人「あ……」

桑原「よう」

大西「元気かい？」

義人「ど、どうしたんですか、二人とも」

桑原「実は少し話があっつな」

義人「……」

大西「まだ一般には公表されていないのだが……」

……

義人「……（うっすら勘付く）」

桑原「君だけには、二人から伝えようと思っつな」

義人「……」

桑原「……」

桑原「山本さんが戦死した」

義人「……」

大西「南方の前線を視察中に、撃墜されたそ

うだ」

義人「……」

桑原「大本営発表まで、秘匿するようにな」

義人「……」

固まったまま動けない義人。

その脳裡に、先日、山本の文机に積んで
あった数冊の手帖がフラッシュバックす
る。

大西「大丈夫か？」

義人「……俺は……何の役にも立てなかった」

大西「何を言うんだ、おい」

桑原「気をしっかり持て！」

義人「俺は……俺は一体今まで何を……、骨相学で何をやってきたんだ……？」
その場にへたり込み、呆然とする義人。

○ 霞ヶ浦航空基地・試験会場

古いラジオが大相撲中継を流している。
テロップ―『1944年』

音が途切れ、ラジオを叩いている加賀見。

加賀見「クソ、このオンボロめ！」

加賀見「あり、柄沢、連敗かよ。もうこいつは、しこ名が付く前に引退だな。クソ、こんなヤツに賭けるンじゃなかった、大損だ！」

奥峰「あなた、何なんですか？」

加賀見「ん？ まあ、腐れ縁つーのかな。いや、同士っていうのかな？ ねえ、旦那？」

義人「……」

心ここにあらずで、ぼんやりと外を見やっている。

加賀見「(奥峰に)旦那、まだ山本元帥のこと

ひきずってんの？ もう1年以上経つのに」

奥峰「ええ」

加賀見「骨相の旦那。今日はパーツといきやしようや。ね？」

奥峰、名簿をめくって、

奥峰「でも最近、死相の出てる応募者減りましたね」

義人「終わるのさ、戦争が……」

加賀見「そうなんですかい？ でもこの名簿の死相が出る予科練の兵隊集めて、特攻隊造ってるって噂ですぜ」

義人「……？ 今何て言った？」

加賀見「へ？」

義人「その話、本当か？」

奥峰「何で部外者のあなたがそんなこと」

加賀見「あつしの地獄耳をなめてもらっちゃ困りませあ」

無言で部屋を出ていく義人。

加賀見「旦那？」

奥峰「水野さん！」

○ 海軍軍令部・廊下

歩く大西に食い下がっている義人。

義人「死相の浮かんでいる人間で、特攻隊を編成するとはどういう見ですか？」

大西「どういう見とは何だ？ 当たり前じゃないか、何を言つとる。特攻は英霊になつてこそ成功するのだ。稀代の骨相学者も大分お疲れのようだな、ガハハハ」

義人「戦争はもうじき終わります！」

大西「戦争が終わる？ 寝言は寝てから言うものだぞ、水野君。あと二千万、日本国男子の半分を特攻に出せば、必ず勝てるんだ。

このまま攻撃を続け、せめて満州事変の頃まで日本の地位を戻す。それから講和だ」

義人「本気でですか？」

大西「おい、いくら君でもこれ以上、暴言を吐くとただじゃ済まさんぞ」

義人「……」

大西「歴史は多大な犠牲の上に成り立つのだ」

大西の相をさり気なく診る義人。

義人「……」

大西「ま、よろしくたのむぞ」

去っていく大西の背中を見つめる義人。憐れんだ風にポツリと呟く。

義人「……自決か……」

大西の背中に小さく敬礼する。

しばし悄然として、ハツとあることに気付く義人。

義人「まさか……」

○ 厚木基地

人を探して彷徨っている義人。

訓練機を磨いている竜造を発見する。

竜造「義人に気付き」おう、義人じゃないか。どうした、こんなところで」

義人「……特攻隊に志願したのか？」

竜造「ん？ まあな」

義人「……」

竜造 「どうやって知った？ やっぱり情報がいくのか？」
義人 「なんでだ？」
竜造 「一応言っとくけど、お前に死を予言されたからじゃないぞ」
義人 「……」
竜造 「変な責任感じるなよ」
義人 「……」
竜造 「これは自分の意思だ」
義人 「竜造。今からでも俺が口聞くから、村に戻って――」
竜造 「もうお前と取っ組み合いはしたくない」
竜造、戦闘機の操縦席に乗り、内部を掃除する。
操縦桿の横にさり気なく張ってある圭子の写真。
竜造 「こんなこと言うの悔しいけど、俺はお前が羨ましかった。妙な才能があつて、好きなことに打ち込んでるお前が……」
義人 「……」
竜造 「俺なんて何の才能もない、代々続く米問屋を親から継いだだけの凡人だ」
義人 「……」
竜造 「そんな俺でもこの命で、お国のためにお役に立てるんだ」
義人 「……」
竜造 「本望だよ」
義人 「……」
竜造 「ひよつとして羨ましいか？」
義人 「……」
何も言えず、突っ立ったままの義人。
竜造 「あ、それから義人」
義人 「？」
竜造 「圭子のこと頼んだぞ」
義人 「……」
『若鷺の歌』を口ずさみながら掃除を続ける竜造。

○ 夜空を進撃するB・29爆撃機
前シーンの竜造が歌う『若鷺の歌』が続

いてオーバーラップする。
テロップ―『1945年』

○ 街中

鳴り響く空襲警報。
テロップ―『3月10日』

○ 義人の寮

仰向けに寝転んでいた義人が、警報に跳ね起きる。

○ 街路

逃げ惑う人々の波。
そんな中、赤ん坊を背負った婦人が若い男の子を連れて逃げています。
男の子が転んで泣きわめき、困り果てる婦人。
遠くの空は、B・29の爆撃で赤く染まっています。

婦人「……！」

そこに義人が駆けつけ、男の子を抱きかかえる。

義人「(婦人を即し)早く！」

○ 防空壕

避難民ですし詰めの中。
街が爆撃される地響きが轟いている。
不安顔の避難民の中にまじっている義人と先の婦人と若い男の子。
婦人の背の赤ん坊が、ぐずり出して泣きわめく。

避難民「うるせーな、静かにさせる！」

婦人「すみません」

必死に赤ん坊をあやす婦人。

横にいる男の子も恐怖で顔が歪んでいく。

義人、そんな男の子の肩をつかみ、

義人「大丈夫だ。ここにいる人は皆、助かる。

絶対だ」

安心して婦人にしがみつく男の子。

婦人「ありがとうございます。おかげで助か

りました」
深々と義人に頭をさげる婦人。
義人「……」

○ 焦土と化した東京の全景（翌日の昼）

○ 街の片隅

残骸となった家屋の片隅に立ち、街並みを眺めている義人。
その前を、死体を山と積んだトラックが通り過ぎていく。
蹲る戦災孤児の顔をふと見やるも、視線を逸らしてしまう。

○ 霞ヶ浦航空基地・広場（日替わり）

空虚に寝転がっている義人。

横で同じように寝転んでいる加賀見。

加賀見「骨相の旦那、いいんですかい、仕事さぼって」

義人「……」

加賀見「こうなったらあつしと組んで、骨相学で儲けましょうや。ねえ？ いい考えがあるンでさあ」

そこに奥峰が呼びに来る。

加賀見「やばい、小うるさい眼鏡が来やしたぜ」

奥峰「水野さん、連絡がありました」

義人「！？」

奥峰「大戸竜造さん、出撃したそうです」

義人「……」

奥峰「でも残念ながら敵艦からは反れて、海に……」

義人「……そうか……」

奥峰も沈痛な表情で横に腰かける。

しばらくたって、静かに語り出す奥峰。

奥峰「……この間の空襲、僕の家は大丈夫だったんですけど、隣の家に焼夷弾が落ちま

して、家が焼け落ちました」

義人「……」

加賀見「……」

奥峰「隣の家の家族は、庭の防空壕に避難してたんですけど、その入口に家が倒れて、隣の家族は中に閉じ込められました」

義人「……」

加賀見「……」

奥峰「それで生きたまま蒸し焼きになって。僕たちが次の日、防空壕を開けたら、隣の家の中はパンパンにふくれてました、隣の家はパンパンにふくれてました」

義人「……」

加賀見「……」

奥峰「その中には3歳の子供もいて……」

義人「……」

加賀見「……」

奥峰「水野さん、もし水野さんの骨相見で隣の家族の死相が分かっていたら、あんなムゴイ死に方、回避出来たんですかね？」

義人「……」

加賀見「……」

奥峰「苦しかっただろうな……。酷すぎますよ」

堪えきれずに涙をこぼす奥峰。

義人「……」

加賀見「……」

午後の日差しが、のどかに3人に降り注ぐ。

○ 竜造の家・前（日替わり）

佇む義人。

意を決して、中に入る。

○ 同・玄関

義人「病気？」

女中「はい。旦那様がお亡くなりになってから奥様、具合が急に……」

義人「そうですか」

女中「すぐに奥様にお知らせしますので――」
義人「いや。いいです。線香だけあげて、すぐにお暇しますから」

○ 同・居間

仏壇の竜造の位牌に手を合わせている義人。

後ろの障子がスツと開き、圭子が部屋に入ってくる。

圭子「義人君」

義人「圭子……」

圭子「ヒドイじゃない。黙って来て黙って帰るなんて。あんまりよ」

義人「……」

圭子「……久しぶりね」

義人「うん」

圭子「元氣？」

義人「ああ」

圭子「そう」

義人「……病気なのか？」

見ると圭子の顔色は優れない。

圭子「ええ。ちよつと胸が……」

義人「……」

義人、圭子の顔を見つめ、相を診る。

義人「(青褪める)」

圭子「どう？ 私の相」

義人「……」

圭子「やっぱりダメか」

義人「……」

圭子「……」

義人、圭子の手をギュッと掴み、立ち上がる。

圭子「え、何？ 義人君？」

○ 同・前

圭子の手を取って走っていく義人。

呆気にとられて見送る女中。

圭子「ちよつと、どうしたの突然？」

義人「死なせない。絶対に死なせない」

圭子「！？」

義人「運命がなんだ！ そんなもん俺が変えてやる！」

○ 夜行列車

夜のしじまを駆け抜けていく。

○ 同・車内

並んで揺られている義人と圭子。

圭子「流れ、流れる景色をぼんやりながめ、

圭子「ねえ、義人君、どこ行くの？」

義人「とにかく空襲から逃れるんだ。地方に

行って養生すれば、もしかすると……」

圭子「あんな村、空襲なんかされないし、何

処に行っても私の病は手遅れよ」

義人「そんなの——」

圭子「骨相術の予言って、絶対に変えられない

インじゃなかったの？」

義人「……」

圭子「なのにどうして？」

義人「……」

圭子「だったらどうしてあの夜、こうやって

私の手をとって逃げてくれなかったの？」

義人「……」

圭子「自らの手を見つめ、

圭子「今さらよ」

義人「……」

圭子「遅すぎるよ」

義人「……」

ガタンゴトン。

列車の走行音だけがしばし二人の間を通

り過ぎる。

圭子「ゴメン……。意地悪言って」

義人「……」

圭子「でもよかった。死ぬ前にこうして義人

君と二人つきりになれて」

義人「……」

圭子「……」

義人「……」

圭子「……いじいじ一人でもって悩むのは、

やめること。いつも一言多い嫌味な性格も

改善すること。もう少し、人の気持ちも慮

ること。そうすれば、義人君はきつといい

人に巡り合えるよ」

義人「……」

圭子「大きなお世話か」
義人「……」
圭子「でも私はそんな義人君の不器用なところがある」
義人「……」
圭子「大っ嫌いだった（クスツと笑う）」
義人「……」
圭子「次の駅で戻る。ね？」

○ 列車が闇に飲まれていく

○ 高台（日替わり）

喪服姿の義人が、遠くに見える少人数の葬列をぼんやり眺めている。
かつて竜造が折った木の枝を見やる。
義人「……」

○ 水野家・洗面所（日替わり）

鏡に写った自分の顔を見つめる義人。
じっと自分の相を診る。
突如として鏡を殴りつける義人。

○ 同・義人の部屋

抜け殻のように机に突っ伏している義人。
タミの声「義人、義人」
障子を開けてタミが顔を出す。
タミ「今日も仕事行かないのかい？」
義人「……」
タミ「それとあんた洗面所の鏡割った？」
義人「……ねえ、母さん」
タミ「ん？」
義人「父さんは自分に死相を見たから、軍隊に行ったのかな？」
タミ「……」
義人「……」
タミ「だと思っよ」
義人「そっか」
タミ「……お前まさか……」
義人「心配しないでいいよ。俺はまだ死なない。いや、死ねないから」

タミ「何言ってるんだい。今のままじゃ死んでるのと同じだろ。仕事に行きなさい。いいね？」

ピシャツと障子を閉めるタミ。
再び、ゴロンと仰向けになる義人。

するとコンコンと窓を叩く音が木霊する。

義人「!？」

と、窓の方を振り返る。

するとそこにいたのは猫であった。

義人「……なんだ、お前か」

窓を開けて、猫を部屋に入れる義人。

続いて子猫も一緒に入ってくる。

部屋を元気に走り回る子猫。

積んである本を倒していく。

すると本の中に混じっていたアルバムから、一枚の写真がヒラリと床に落ちる。

義人「？」

写真を取りあげると、それは子供の頃の義人と圭子、竜造が写ったスリーショットの写真であった。

義人「……」

ふと写真の裏を見ると、そこには『もし義人君がいなければ私は自動車事故で死んでいたかもしれません。今があるのは義人君のおかげです。これからも義人君の学問で世の中を救って下さい。圭子』と幼い字で書かれている。

義人「……」

文字を眺めているうちに涙が溢れてくる義人。

一人、むせび泣く。

× × × ×

フラッシュバックー。

焼け野原の東京。

トラックで運ばれる焼死体。

圭子と竜造の生前の笑顔。

× × × ×

震える義人の肩。

『世の中を救って下さい』の文字の上に涙が落ちる。

× × ×
フラッシュバック―。

父親に詰め寄った圭子の言葉。

圭子「義人君の予言がなかったら、私だって一緒に死んでたかもしれないんだよ！」

防空壕の中で、深々と義人に頭をさげる婦人。

婦人「ありがとうございます。おかげで助かりました」

そして、山本の言葉。

山本「君の成すべきことは内地にある」

× × ×
やがて肩の震えが止まる。

そして―、
眼を開き、静かに立ち上がる義人。

○ 同・居間

タミと共に食事している加賀見。

加賀見「おかわりお願いしやす」

タミ「はいはい。(すいとんをつぎながら) ねえ、あんたは何をしている人なんだい？」

加賀見「青年実業家です」

タミ「何？ 実業家？」

加賀見「幅広くやってやす。今は一粒食べる
と十歳肌が若返る秘薬を開発中でして。ど
うです、お母さんも一粒」

タミ「あらま、十歳若返るのかい？」
そこに義人が駆け込んでくる。

加賀見「お、骨相の旦那。お邪魔してやす」

義人「行くぞ」

加賀見「へ？」

義人「逆に俺がいるから、死なずに済む人間
がいるかもしれない。そう発想すべきだっ
たんだ！」

加賀見「はあ？」

義人「死相が浮かんでいない人間は、俺が救
っている場合だっているんだ！」

加賀見「旦那？ 言ってる意味が―」

義人「とにかくやるぞ」

加賀見「何を？」

○ 兵舎の片隅（日替わり）

兵卒 A 「このウスノロ！」

兵卒 B 「お前のせいであれだけ今日も殴られたと思っただ、この野郎！」

数人の兵卒が蹲る大男、柄沢長次（27）に、よってたかつて殴る蹴るの暴行を加えている。

柄沢 「ゴメンより。許してくれよう」

「ケツ」と唾を吐いて去っていく兵卒たち。

依然、亀になっている柄沢に近付く影。ビクツとなる柄沢に影の主、義人は手を差し伸べる。

柄沢 「？」

義人、見上げる柄沢の相をじつくり見て、

義人 「合格だ。共に働かないか？」

柄沢 「??？」

○ 営倉（日替わり）

扉がギギギと開かれ、真っ暗だった室内に光が差し込む。

埃が舞う光筋に浮かび上がる背中の刺青、九尾の狐。

刺青の主、堂上が振り返る。

堂上 「なんやもう食事の時間か？」

義人 「飯はくわしてやるから、一緒に来ないか？」

堂上 「なんやお前？ アレ、どっかで見た顔やな。おたく、俳優かなんかか？」

義人 「一緒に来るか？ それともココで死ぬまで座って悟りでも開くか？」

堂上 「わかったわかった、行きます行きます」

○ 八代の家・蔵の前（日替わり）

立ち話をしている義人と八代。

八代 「自由に使ってもらってかまわんよ。もう何年も誰も足を踏み入れとらん。今じゃネズミの王国だ」

義人 「ありがとうございます」

八代「しかしホントに君は物好きだねえ。何を
するつもりか知らんが、君の動向を楽し
みにしとるよ。ホホホホ」

○ 同・蔵の中（日替わり）

アジトに改造された蔵の中、ならず者集
団十数名が整列している。

そんな中、加賀見が横にいる柄沢を睨み
つけている。

柄沢「あの……なんで睨むンスか？」

加賀見「お前のせいでいくら損したと思っ
て

んだ！」

柄沢「はあ？」

義人が奥峰を従え壇上に立つ。

義人「えー皆さん、よくぞ集まってくれた。
まず

は感謝する」

加賀見「骨相の旦那、こんなならず者集めて
何

する気で？」

奥峰「今、水野さ……いや、隊長が話して
る

んだ、話し終わるまで質問は待て！」

「ふわあ」と大あくびをかます堂上。

奥峰「そこ、その人相悪いの！ 無礼だぞ」

義人「まあまあ、軍隊じゃないんだから、そ
う

堅苦しくやらなくても」

奥峰「水……いや、隊長。ここはやっぱり規
律

をですな」

堂上「さっさと終わらせてーや。腹減った」

何か言おうとする奥峰を制し、

義人「見て分かる通り、我々は烏合の衆だ。
が、

ただひとつ共通項がある。それは皆、
死

なない運命にある、ということだ」

義人の話に耳を傾ける、それぞれのリア
ク

クション。

義人「その特性を活かして、何か出来ること
が

ある筈だ」

堂上「来たるべき本土決戦で戦えっちゅうこ
と

とか？」

柄沢「本土決戦！？」

義人「かもしれない。正直、敵は誰になるか
は

分からない。でも我々は未来のある人々

のために、内地で戦うんだ！」
加賀見「なんか面白そうじゃねーの」
堂上「飯が食えんなら、なんでもええわ」
柄沢「おらも」

腑に落ちないながら、それぞれ盛り上がる一同。

義人「(奥峰に)いいのか、こんなことに巻き込んで」

奥峰「水臭いじゃないですか。私はあなたの助手です。あなたの骨相術の素晴らしさは、私が一番実感してます」

○ 青空(日替わり) 蟬の大合唱。

○ アジト

ドクロの旗を掲げている加賀見。

加賀見「どうだ、いかすだろ？」

柄沢「なんか海賊みたいっスね」

堂上「海賊上等やないかい？ 似たようなモンやろ？」

奥峰、虫歯が痛むのか頬を押さえながら、奥峰「ちよつと品がないな。もう少し、エレ

ガントに出来ないか？」

堂上「愚連隊に品を求めるなんざ、道理としておかしいんちゃうか？」

奥峰「我々は高い意識を持つべきだ。愚連隊などというような呼び方は慎め」

堂上「おうおう、インテリが生意気に」

奥峰「何？」
すかさず「痛っ！」と頬を押さえる奥峰。

瞬間、横から奥峰をぶん殴る堂上。

吹っ飛ぶ奥峰。

その口元からポロツと虫歯がこぼれ落ちる。

堂上「今じゃ歯医者も麻酔ナシや、丁度ええやろ？ 治療費はまけといたるわ」

奥峰「クソ！」

加賀見が手を貸して奥峰を起こし、

加賀見「まあまあ、お二人さん、ここは穏便

に――

電話が鳴り、居眠りから目覚めた八代が受話器を取る。

八代「もしもし……！？ 水野君！」

奥から出てくる義人。

義人「はい？」

八代「海軍大臣からだ」

義人「！？」

加賀見「大臣！」

いろめき立つ一同。

義人「（電話口に出て）はい、水野です」

米内の声「ああ、君が水野君か。米内だ。君

のことは山本さんから聞いてる」

義人「は、はい」

米内の声「生前に山本さんから不穏な空気が

漂った時は君に連絡しろと言われててね。

それを思い出して、君の実家に電話したら、

ここの番号を言われてね」

義人「山本さんが……」

米内の声「ちよっと今バタバタしてて忙しく

てね。簡単に言うのと、先ほど、ポツダム宣

言受諾のご聖断が正式にくださった」

義人「エ！ ということは……」

米内の声「終戦だよ」

義人「……」

米内の声「これから詔書案の会議に入る。そ

れから陛下による詔書の音読を録音し、明

日の正午にラジオ放送する予定だ」

義人「……」

米内の声「それに伴って今、陸軍内部で不穏

な動きが出ている」

義人「……」

米内の声「連中がどう暴発するは分からんし、

こちらは対応している余裕もない」

義人「……」

米内の声「この終戦の機を逃せば、また多く

の民の血が流れる。新型爆弾で受けた広島

と長崎の被害は聞いているだろう？」

義人「……」

米内の声「まあ、確かな情報ではないが……

たのめるか？」
真剣な表情で仲間の方を振り返る義人。
奥ではいまだドクロの旗のデザイン論争
が続いている。

○ 近衛師団司令部（夜）
テロップ―『8月15日』

○ 同・師団長室

テロップ―『午前0時』
森越師団長（51）に面会している義人
と柄沢。

師団長の隣に控える白石道教中佐（35）。
森「クーデター？陸軍の？」

義人「はい」

森「うむ……。しかし陸相ではなく海相の情
報なんでしょう？」

義人「……」

森「それよか君は何処の所属の者だ？」

義人「……」

森「なんだ、人の顔をじっと見て。気持ちの
悪いヤツだな。わしにその気はないぞ」

白石「おい、お前。いくら米内大臣の使いと
はいえ師団長閣下に無礼だぞ」

義人に詰め寄る白石の前に柄沢の巨体が、
ヌツと立ち塞がる。

白石「な、なんだ貴様？」

義人、柄沢を制し、

義人「すいません。お忙しいところ失礼しま
した」

と、さっさと部屋を出て行く。

入れ違いに、井田正孝中佐（33）と椎
崎二郎中佐（34）が室内に入ってくる。

井田「失礼します！」

○ 同・廊下

師団長室から出てくる義人と柄沢。

義人「ここで師団長閣下を見張ってくれ」

柄沢「？」

義人「死相が極めて濃い。あの人はもうじき、

「うだな、数分以内に死ぬだろう」

柄沢「！？」

義人「ことが動いたら連絡しろ」

柄沢「（コクコク頷く）」

柄沢を残して去っていく義人。

するとその直後にズンズンと畑中少佐が部下を連れて廊下を進んでくる。

師団長室の前に止まり、手荒くドアをノックし、入室する畑中。

物陰に隠れて、事態を見守る柄沢。

やがて森の絶叫と銃声が空を裂く。

柄沢「！」

部屋から汗びっしよりの畑中が興奮気味に飛び出してくる。

柄沢、そつと師団長室の中を覗くと、そこには血まみれの森の死体と、斬り落とされた白石の首が転がっている。

柄沢「ひっ！！」

急いで駆け出す柄沢。

○ 皇居各所

テロップ―『午前2時』

近衛師団と青年将校たちにより、次々に防衛線が張られていく。

○ 近衛師団司令部・近辺

物陰に集結し、近衛師団の動員を見守っている義人とその私兵部隊。

そこには青褪めた柄沢もいる。

義人「これは……」

奥峰「おそらく死んだ師団長閣下に成り代わ

って偽の命令を発したんでしょう。これで

東部軍が動けば、最悪の事態になります」

義人「よし……」

顔を突き合わせて話し合う私兵部隊。

次の瞬間、サッと散会する。

○ 宮内省・廊下

テロップ―『午前4時』

近衛兵により武装解除されている皇宮警

察官たち。
兵士の間では、「玉音盤を捜せ！」と怒号が飛び交っている。
兵士「陛下の終戦詔書を録音した玉音盤をなんとでも奪取せよ！ 断じて放送させてはならん！」
その中を巧妙に掻い潜って走る加賀見。

○ 同・別の廊下

一人、玉音盤を抱えて右往左往している
徳川義寛侍従長（39）。
積んであった荷物の隙間に、無理から隠そうと試みる。
加賀見「ダメだダメだ、そんなとこ」
徳川「ひっ！」
加賀見「こっちだ、おっさん」
徳川「おっさんって……。あ、あなたは？」
加賀見「蛇の道は蛇。モノを隠すには泥棒に聞けっつね」
徳川「はあ？」
加賀見、徳川を皇后宮職事務官室に導いていく。

○ 東部軍司令部・前

兵士たちが出動準備にバタバタしている。
田中の声「何、偽命令だど！？」

○ 同・司令官室

義人「だから東部軍の出動は待ってください」
田中静彦司令官（58）の前に立つ義人。
義人「森師団長閣下は反乱軍に殺されました」
田中「……」
義人「司令官！」
田中「私に君を信じろと。大臣の使いかなんか知らんが、実際問題、君の方こそどこの馬の骨とも知れんじやないか」
義人、田中の相を診る。
田中「何かその、正式な書類をだね……」
義人「（相を診ている）」
田中「聞いておるのかね？」

義人「(深いため息をつく)」

田中「……？」

義人「謙虚官が隆起しているあなたは人情家です。お兄さんが亡くなり、あなたは家督を継いだ。あなたはそのお兄さんに随分、恩義を感じている」

田中「な……」

義人「そしてこの戦争の責任も……」

田中「……」

義人「今日のこの反乱軍鎮圧を最後の仕事にしませんか？ これ以上、戦争の犠牲者を出すのは、あなたの本意ではないはずです」

田中「……」

義人「……」

長くにらみ合う二人。

○ 首相私邸・前

車が滑り込み、降り立つ奥峰と堂上。

○ 同・玄関口

奥峰「首相のお命が危ないと何度言えば分かる！」

警備兵「……と言われましても、素性の怪しい方をお通しすることは……」

奥峰「いいから首相に面会を頼む」

警備兵「もうお休みになられてますので」

奥峰「だからそういう次元の――」

話している途中で突如、警備兵を殴りつける堂上。

異変に気付いて駆け付けたもう一人の警備兵もぶん殴って気絶させる。

奥峰に振り返ってニヤリと微笑む堂上。

堂上「緊急事態や。しゃーないやろ？」

奥峰「(複雑な表情)」

○ 同・寝室

首相、鈴木貫太郎(77)を叩き起こす堂上。

堂上「オラ、起きろ、じーさん！」

鈴木「ん、なんだ？ 賊か？」

堂上「話は後や。はよ来い！」
奥峰「おい、堂上君、もつと丁重に扱えよ。
かりにも総理大臣だぞ」

堂上「知らんがな。ホラ、時間ないねん、は
よせえ。テキパキ動かんかい！」

鈴木「まあまあ、年寄をせかすんじやない。
あく腰痛い。ところでこの賊だ？」
奥峰「我々は賊ではありません。首相を救い
にきました」

鈴木「ほう。まあお茶でも飲もう。いい水羊
糞がある」

そう言う鈴木首相の頭を、ペチンツとは
たく堂上。

堂上「何が水羊糞や、アホ！ 国民は物資不
足で飢えとるンやぞ！ はよ準備せえや！」

○ 同・前

首相を乗せて、急遽、車を発進する奥峰
と堂上。

間一髪、すぐ後に佐々木武雄大尉(40)
率いる国民神風隊が到着。
屋敷を襲撃する。

○ 車内

運転する奥峰。

後部座席の鈴木首相と堂上。

遠くで怒声が聴こえ、首相私邸の方角に
火があがる。

鈴木「じゃあ、本郷西片町の妹のところにて
も身を隠そうかな」

奥峰「ハイ」
鈴木「(背後の火の手を見て)物騒な連中だな
あ」

堂上「じーさん、なかなか肝すわってるやな
いかい。気に入ったわ」

鈴木「これで賊に襲われるのも二度目だ。い
やでも慣れるよ。まったく不運の星の下に
生まれよ」

堂上「いや、生き延びたんなら幸運ちゃうか？」
鈴木「ハハハ、違くない。ところで君は筋モ

ンか？」
堂上「まあな。今は縁あって一人の男に仕えてるけどな」
鈴木「そうか。ならわしも仕事があったら頼もうかな」
堂上「おう、なんでも言うてくれ。連絡はこの相棒にたのむわ。わしは頭悪いさかい、判断は相棒がするよって」
奥峰「誰が相棒だ！」
鈴木「心強い二人だな。ハハハ」
奥峰「(深いため息)」

○ 放送会館・前

テロップ―『午前5時』

部下「少佐殿、あれは？」
部下「少佐殿、あれは？」

畑中「？」
見ると放送会館の前に、ドクロの旗がはためいている。

すると突如、畑中たちの前に数名の影が立ち塞がる。

義人率いる私兵軍団である。

部下「なんだ、お前たち！」

進み出る義人。

畑中「！？ 貴様は確か」

義人「あんたは……」

畑中「これはこれは奇遇だな。海軍のペテン師のお出ました」

義人「もうおしまいだ。東部軍が鎮圧に出動した。偽師団長命令もバレてるぞ」

畑中「そこをどけ！」

義人「兵をひけ！」

畑中「陛下を現人神として、一君万民が結合を遂げる姿こそ国体護持だ。形式的に皇室が残ったとしても、降伏すれば国体護持など叶うものか。それに連合国が約束を守る確証がどこにある？」

義人「……」

畑中「南米のパラグアイは五年戦争で人口の八割を失うまで戦った。フィンランドしか

り、中国しかり。対して我が国は、神州生
気の民と自負しながら、本土決戦を行わず
降伏するのではあまりに情けない。何より
玉碎し、特攻で散った英霊に申し訳がた
ん！この旨を放送を通して、国民に訴え
るのだ！」

義人「本土決戦はない。俺には分かる」

畑中「お得意の占いか？」

拳銃を抜く畑中。

義人「無駄だ」

畑中「この距離じゃ外さんぞ」

息を飲む義人の私兵たち。

義人、悠然と歩を進める。

畑中「そんなに死にたきや、死ね！」

引き金を引く畑中。

バンッバンッ！と二発の銃声が響き、

暴発した拳銃が投げ出され、地面を転が

っていく。

血まみれになった手を抑える畑中。

畑中「な……」

その隙に義人の私兵が反乱兵を制圧する。

豪快に投げ飛ばして、活躍している柄沢。

放心して座り込む畑中。

そんな畑中を見下ろす義人。

畑中「……俺の未来が分かるか？」

義人「前に予言した通りだ」

畑中「……」

義人「……」

畑中「では、日本の行く末は？」

義人「少なくとも、もう国民が大量殺戮に見

舞われることはない」

畑中「……」

義人「……」

畑中「……でも、それでいいのか？日本の

未来はそれで……」

義人「そこまでは俺にも分からんさ」

○ 皇居各所

出動した東部軍により、反乱軍がすみや
かに鎮圧されていく。

○ のぼる朝日

○ 皇居・前

加賀見が古いラジオを叩いている。

加賀見「クソ、このオンボロめ！」

音が鳴り、玉音放送が流れる。

加賀見と並んで放送を聞く義人。

遠くでは、畑中と椎崎が芝生の上に座り、

拳銃自決を遂げている姿が小さく見える。

その光景を、遠目で見つめる義人。

義人「……」

やがて音が鳴らなくなるラジオ。

加賀見「あくもうダメだ、こりゃ」

周囲の芝生の上では、泣き崩れている人

間がちらほら見える。

加賀見「骨相の旦那。あつしらみたいな、な

らず者が歴史の要に貢献するたあ、痛快で

すな」

義人「表舞台には出ないけどな」

加賀見「そんなの望んでやしませんよ。それ

よか次の出番はあるんで？」

義人「見たところ、当分のあいだ平和は続く。

ということは――」

加賀見「その平和はあつしらが守っているか

もしれないと」

義人「(微笑む)」

そつと懐に入れてあつた、子供の頃の義

人と圭子、竜造が写った写真を取り出す

義人。

見ると写真を持つ義人の手は血に塗れて

いる。

義人「……」

解放されたようにホッと息をつく義人。

再び写真を大事に懐にしまう。

その脇腹には銃痕があり、じんわりと血

のしみが拡がっている。

○ 水野家・洗面所

タミが割れた鏡を見つめている。

タミ「親子って運命も似るんだねえ……」
その眼に涙がうるむ。

○ 皇居・前

加賀見と共に歩き出す義人。

ふと義人の足元に続く血痕に気付く加賀見。

加賀見「だ、旦那？」

義人「今日は皆で将棋大会でもするか？」

義人の視線のその先には、はためくドロの旗の下、奥峰、堂上、柄沢たち私兵軍団が、わいわい騒いでいる。

完